

精神分析的心理療法における美的体験の意義

— Meltzer, D. の美の理解をめぐって —

上田 勝久

I. はじめに

これまでに精神分析の世界では、その営みに本質的な変化が訪れる瞬間を様々な言葉であらわしてきた。その一例として「選択された事実」(Bion, W. R., 1962)の生起、「essential moment」(Baranger, M. et al, 1966), 「aliveness な感覚」(Ogden, T. H., 1997), 「ターニングポイント」(村岡, 2000), 「劇的瞬間」(藤山, 2010)などのフレーズをあげることができるだろう。

分析的な営みにおいて何か本質的な変化が生じたとき、そこにはある種の感動や驚き、喜びや満足が去来する。だが、それは単に歓喜に満ちた現象ではないこともたしかである。その事態には畏怖や神秘、驚嘆、戦慄、苦悶といった私たちを強く慄かせる情動も含みこまれている。Bion (1970)の「破局的変化」という概念が示すように、その瞬間はときに破壊的で、ときに脱構築的な解体をクライアントとセラピストの双方にもたらすこともある。

本稿ではこのような変化の瞬間を考えるうえで、英国の分析家 Meltzer (1988) が提唱した「美的体験」に注目してみようと思う。というのも、彼が美的体験をまさに上述のようなきわめて包括的で輻輳的な情動体験としてえがきだしたからである。

かつての Freud, S. の性欲動と同じく、Meltzer は美を人のところを基礎づける根源的な要素のひとつとしてとらえた。彼にとって美は人のところを創造し、発展させ、ひいては人が人を愛し、憎み、知ろうとすることの根幹となる要素であった。

この「美的体験」という観点は分析臨床における治療機序を考えるうえで、相当に大きな意義をはらんでくるように私には思える。

だが、ここにはいくつかの原理的な問いが投げかけられることになる。

「美的体験」とは果たしていかなる事態なのだろうか。Meltzer はそれをどのようにとらえたのだろうか。そして、様々な治療機序論が提出されるなかで一体なぜ「美」なのだろうか。

これらの問いを考えるためには、まずは Meltzer が美的な次元へとその思考を練り上げていった経緯を追っていく必要があるだろう。

II. 美的次元への推移

Meltzer の美の理論は Freud, S., Klein, M., Bion らのアイデアを通過した先に生みだされたものである (Meltzer, 1984, 1986, 1988)。この変遷については、すでに福本 (1995) や飛谷 (2004, 2011) らによって明瞭にまとめられた総説が存在している。彼らの記述を補助線にしながら、ここでは特に Klein と Bion の思索のいかなる要素が Meltzer を美的次元へと至らせたのかについて考

えてみたい。

Meltzer によれば、Freud, S.の力動論的、発生論的、経済論的、構造論的観点は神経生理学および流体静力学的なこころのモデル化であった。そして、それゆえに Freud, S.は(超自我論によって内在化という考えに手をかけていたにもかかわらず)内的世界(internal world)の概念を十分に発展させることができなかった。

一方、Klein は人がその発達早期から母親の身体内部をめぐって様々な欲望、空想、葛藤を抱き、その内部に収納された乳房やペニスといった部分的な対象との間で活発に交流していることを明らかにした。この内的対象の想定は内的世界というこころの空間モデルを提起し、内的世界と外的世界、内的対象の内部や外的対象の内部といった視座にもとづくこころの探索法をもたらした。

Meltzer はこうした内的対象の蠢きがひとつの世界を構成しているありかたをこころの地理的次元と称し、その結果として「パーソナリティの神学的側面が明らかにされた」(1984)ことを主張した。その論によれば、人は誰しもが「内的対象が神の役割を果たす宗教をもたなければならない」のであり、「それらの神が実際にこころのなかで果たす機能」への「信頼」こそがこころを基礎づけていくことになる。

彼のこの「神」という言葉遣いには、内的対象が本来的には手の届きたい存在であることが含意されている。こころは私たちの意図を越えた内的対象との相互作用によって成立し、私たちはその主人になることも、その対象を所有することも叶わず、ただそれを感じ取る(apprehend)(Bion, 1965) ことしかできない。しかし、だからこそ私たちは対象とナルシシスティックに同一化することなく、「対象と共に考える」(Williams, M. H., 1988) 可能性へと開かれていく。「追い求められるべきは神(母)の修復であり、(形なく、無限で、語りえない)神の進展でもあるような活動である」(Bion, 1970 筆者訳)。内的対象に関するこの発想は、おそらくは後の美の理論への展開と深く結びついている。

そして、Klein から続いて Bion はこうした内的対象との関係によって喚起される「情動体験」こそをこころの中核に据えた。彼は統合失調症者との臨床経験をもとに、思考(thoughts)と思考作用(thinking)の差異を明確にし、考えること(thinking)や知ること(knowing)がきわめて情動的な経験であることをつかんだ。

彼がβ要素と呼ぶ、未だ心的に思考しえない感覚印象や原始的な情動は、そのままではこころに蓄積されず、様々な形で排泄されることになる。それは投影同一化を介して対人交流のなかに展開され、あるいは行動化や身体化によって処理される。通常、この考えられない考えはα機能によってこころに蓄積されうるα要素へと変換されるが、乳児やクライエントがα機能を十分に発揮しえないとき、β要素の受け手となった母親およびセラピストが自身のα機能を駆使して彼らの体験に意味をもたらし、体験の消化を手助けすることになる(コンテイナー-コンテインドモデル)。

Bion はさらに対象との情動的つながりの根源的要素を、愛すること(L-link)、憎むこと(H-link)、知ること(K-link)に分類し、LとHがKへと結実する過程こそが精神分析的な営みであることを示した。飛谷(2011)が指摘するように、彼はKlein がサディズムの一派生物としてしか位置づけられなかった認識欲動をより生産的な形でとらえなおしたといえるだろう。

Meltzer はこのような Bion の想定を認識論的次元と評し、さらにこの見解を発展させて、内的世界を思考作用のおよぶ心的生活と思考作用のおよばないマインドレスな原心的(proto-mental) 生

活とに分類した。後者の世界では未だ象徴が存在せず、体験の意味は剥ぎとられ、外的事象はモノ的な事実の総体と化す。このとき人はただ自動反応的に生きること（「基礎過程心性との共謀」

（1984））を余儀なくされ、情動を十全に体験し、思考し、物事を判断し、決断していくことから大きく隔てられていく。

このように Bion の α 機能（思考作用）は人が人間的に生きていくことの礎石となっている。 α 機能は意味生成の装置であり、「情緒体験のもたらす無限の意味世界から強い圧迫を受けつつ、そこにある真実を知ることを栄養として成長する」（飛谷，2011）ために不可欠な機能である。そして、その思考作用の醸成は母の不在、つまりは乳児にとって生きる糧となる乳房の不在を機に開始される。その欲求不満と心的苦痛のなかで乳児が乳房の象徴的再現を（事態を考えようとするところを）志向すると共に、ふたたび現れた母に不在時の迫害不安を包みこまれることで、母の「思考する乳房」（＝ α 機能）の内在化が促進されることになる。

このような Bion の知はきわめてロジカルである。だが、Meltzer はここに疑義を挟みこんだ。「知ること（K）」への志向は本当に不在の対象との関係のみに依拠するものなのだろうか。そもそも人の情動——L, H, K——を喚起するものとは何なのだろうか。

彼の処女作である『精神分析過程』（1967）のころから垣間見え、『精神分析と美』（1988）によって明確にされた美的次元への道はこうした問いから切り開かれ、結実していく。

Ⅲ. Meltzer の美の理論

その答えを Meltzer は「美」に求めた。K への志向は母の美しい外面の内部を知ることへの情熱を機としており、L, H, K への切望は美的対象により喚起された情熱をもとに始動する。「美は真実であり、真実は美」（Keats, J.）となると、Meltzer はそのふたつのテーゼを「情熱」によって架橋した。

情熱とは真実への駆り立てである。Meltzer の視点は、「選択された事実」や「aliveness な感覚」、「劇的瞬間」といった事態を引き起こすその根本的な動因に向けられている。何か本質的な変化が生まれようとするとき、そこには必ず真実への駆り立てが生起し、その駆り立ては美的対象への情熱に起因している。

無論、その変化によってつかみだされた理解はときにおぞましく、醜く、痛ましい事実かもしれない。だが、そのおぞましさを触知せんとするそのところは美を宿している。おぞましきや醜さや痛ましきは、それが真実である限り反美的なものにはなりえない。Meltzer にとって反美的なものとは、真実から目を背けようとする嘘であり、偽善であり、冷笑的態度であり、俗物根性である。それらは美への情熱を欠いた—LHK の産物である。Meltzer は Bion の負の結合を考察しなおすことで、「知ること」を人の根源に敷く Bion の思索のさらに内奥に分け入ったといえるだろう。

その到達点が美的次元であった。Bion は思考過程が極度に障害されたある患者の「意味」をつかんだとき、それが「科学的経験よりも美的経験のおかげ」であることを『変形』（1965）のなかのわずか 1 行に記したが、Meltzer はその 1 行にこそ真実への道程を見たのである（この 1 行に着目した『クライン派の発展』（1978）のなかで、彼は Bion がグリッドに美的な次元を据えなかったことを指摘し、G 行の科学的演繹体系を美的な水準へと置換した〔同時に LHK と—LHK を対応させた表へと置換した〕新たなグリッドを提案している）。

そして、Meltzer は美的体験をその独自の発達論と病理論とに接続させながら論を深めていった。以下にその概観を示してみたい。

彼の発達論は胎内から開始される。胎児は聞こえる音楽と一定のリズムを保つ心地よい揺れのなか、すでに豊かな想像力をもってそこに息づいている。その音楽——母の声——は原初の美的対象である。誕生というセブーラを経て外界に登場した乳児は、子宮から追放された無力感——重力や飢え、激しい音や温度や外界の眩さ——のなかで、母親という圧倒的な美的対象に遭遇する。その美との出会いはひとつの衝撃となる。

だが、その衝撃に晒されつつも、乳児は母の表情、まなざし、乳房から生きるための糧を得て、その美を体感しはじめる。同時にその謎めいた美しい外面の内部を知ることには情熱を迸らせる。それこそが K への衝迫であり、真実への駆り立てである。

しかし、ときに翳りを帯びる母の表情、現れては消え去る乳房によって、乳児の認識欲動はとらえどころのなさへと置き去りにされる。こうして乳児は美的対象への好奇心と不確かさによる苦悶の狭間で美的葛藤を生きることになる。この美的葛藤にもちこたえ、尚も対象を知ろうとするならば、この葛藤は創造性の源泉となり、こころの進展を基礎づけていく。

こうした美の衝撃、その不確かさとわからなさにも耐える能力を、Meltzer は Keats の negative capability と重ね合わせ、人の心的発達における重要な志向とした（ここにおいて美的体験は“感動”という歓喜に満ちたカタルシスの事態とも微妙に質を違えることになる。美的体験はその後の“わからなさにも堪えつつも知ろうとすること”という苦難の道程を含んでいるからである）。

このプロセスのなかで、乳児が授乳関係に内在する美的体験を生き続けることができれば、対象は断片化した部分としてではなく、「乳児—乳房」、「乳首—乳房」といった結合対象として認識される。特に後者は「謎めく寝室で性交する父—母」という結合対象へと発展し、この謎と神秘のヴェールに包まれた結合対象こそが心的な生産性の基盤となり、意味を生み出すコンテイナーとなる。先にもふれたように、それは象徴機能の形成に寄与し、グリッド C 行——夢、夢思考、神話——(Bion, 1963) を生きることへと私たちを誘っていく。

一方、この美的葛藤や美的体験からの退避は、情動的なこころを枯渇させ（—LHK への逆行）、様々な病理と不毛で平板化したこころをつくりだしていく。

対象による美の衝撃に対して分割機制が不適切に使用されれば、部分対象間の分割や統合に様々な混乱がもたらされる。それは対象の役割や機能の混乱を招くことになる。たとえば「乳首」と「ペニス」が混同され、「乳房」が分割されると、性愛に偏向したペニスと羨望に満ちた「穴の空いた乳房」が形成される。そのような対象関係世界を生きる人は母性的な愛と部分対象関係的な性愛とを混同し、いつまでも満たされない嗜癖的な性愛に身を落とすことになるかもしれない。あるいは破壊された乳房からの報復的な迫害に怯え、慢性的な空虚感を抱え続けることになるかもしれない。また、「乳首—ペニス—糞便」、「乳房—尻」などの誤結合によって「悪性の乳首」や「悪性の乳房」が生成されると、排泄物が理想化され、生産性が排泄行為と等置される心的世界がつくりだされていく。それは人をパラノイ德的不信へと導くことになるかもしれない。

さらに、彼の美の理論は『自閉症世界の探求』（1975）にて考察された「こころの次元性」とも結びついている。この書物において、彼はこころの様式を 4 タイプに分類した。それはマインドレスで神経反射的に世界を生きる一次元性のこころ、対象および自己の内部空間が成立せず、投影も

取り入れもできないままに対象の表面的特質に附着的に同一化し続ける二次元性のところ、対象と自己の内部空間が想定されることで、投影同一化を介して自身のところの一部を排出したり、コミュニケーションしたりすることが可能な三次元性のところ、そうした三次元性の世界に時間的展望が加味されることで、対象と自己をひとつの連続体として認識し、自身の志向に沿って対象を取り入れ同一化することのできる四次元性のところの4タイプである。

特に美的体験からの退避は、二次元的なところと三次元的なところの狭間に大きな障壁をつくりだす。この退避によって対象の謎めいた内部空間への探求が放棄されれば、人は三次元的なところを成立させることが困難となる。対象の内部空間を想定しえないことは、そのまま自身のところの内部——その奥行きや広がりや深み——を築くことの困難と直結するからである。そして、“中身のない”もしくは“中身を入れておく容器すらないところ”が構築される。

その後の『The Claustrium（閉所）』（1992）にて記された「内的対象の内部空間への幽閉」という事態は、対象とその美への情熱をKに結びつけられず、対象の支配や占有を目的にその内部へと無造作に侵入した結果である。対象の内部（頭部・乳房、性器、直腸などの各部位）に「招かれざる客」として侵入したことで、人はその閉塞的な世界に半永久的に留め置かれることになる。

こうしたMeltzerの発達論と病理論はKleinやBionの見解をふまつつも、やはり彼らの考えとは質を異にしている。この三者の病理論はいずれもが心的発達に不可欠な「知ること」の停滞を軸に展開されているが、Kleinが自身の攻撃性由来する迫害不安の生起をその停滞の要因としたのに対し、Meltzerは母の美しさによる衝撃とその謎めいた内部の不確かさに対する耐えがたさをその要因としている。また、先述したようにBionが「不在の乳房」との関わりを子どもの思考の発達と結びつけたのに対し、Meltzerは「現前する乳房」との関係に着目している。思考の発達は「現前する対象」の内部を発見したいという情熱的な探求心に依拠している。彼の視座は存在のなかにはらまれる不在性、存在のなかの不確かさにあるといえるだろう。

そして、最大の相違は彼がこの美的葛藤を抑うつポジションにおける事態としてとらえ、人の原初のところを抑うつポジションに位置づけたことである。彼が想定する最早期の乳児は理想化された良い対象/自己と迫害的な悪い対象/自己とに分割され、断片化された世界を生きる乳児ではなく、生後まもなくから外面の美と不可解な内部を併せもつ全体的で複雑な対象と出会い、美的体験への歓喜と苦痛が混在する包括的で複雑な情緒を経験している。つまり、彼は抑うつポジションこそが妄想—分裂ポジションに先行するとし、後者を美的葛藤の苦痛からもたらされた結果、もしくは防衛として位置づけた。そして、この人生の出発点における美的葛藤は従来から語られてきた妄想—分裂ポジションから抑うつポジションへの移行に際して回帰し、その進展は美的対象の不確かさにとまらぬ苦痛に堪えながら、美を理解していく過程によって成し遂げられることを示唆した。

この革新的知見は賛否両論あるところだろう。だが、彼が述べる美の感覚——決して手に入れることはできないが、それでも尚、それを知ろうとする真実への情熱——はたしかに人間の根底に息づいているように私には思える。おそらくMeltzerは日常生活を生きるうえで私たちがいつのまにか置き去りにしてしまったものを、再度私たちのところに喚起しようとしているのではなかろうか。

IV. 臨床における美的体験

このようにMeltzerは美的体験を人の原初の体験に据え、人が健全に、パーソナルに、真に生き

ているという感覚をもつことに美がいかに貢献しているのかをえがきだした。そして、美の衝撃とその葛藤を抱えることが、私たちの心的生活に大きな影響をおよぼす可能性を示した。

彼はその葛藤を抱えるための重要なファクターとして、「美的相互性 (aesthetic reciprocity)」というアイデアを提起している。母の美しさこそがその内部を情熱的に探求し、真実に向かおうとする美的なところを子どもに喚起し、同時にそうした探求心は子どもの潜在的可能性や創造性を、つまりは子どもの美を見いだそうとする母のまなざしによって成立することを彼は示唆した。

心理療法においても、クライアントが美的なところを取り戻し、生きることや世界の美しさを体感するには、彼らの美を感じとり、知ろうとするセラピストのまなざしが不可欠となる。Meltzer にとって精神分析はその最たる方法であった。

だが、一口に方法といっても、それはセラピストの意図や技法によって生じうるものではないような気も私にはしている。おそらくこの美的相互性はそう感じようとして感じられるわけではない、突然にふりかかってくる事態である。Meltzer 自身も美的体験の生成を「一目惚れ」や「インスピレーション」と結びつけたように、それはかなり瞬間的で、直観的で、自生的な体験である。

私たちはある芸術作品の価値をすでに知っている。子どもの誕生が感動的であることも知っている。セラピーでとても貴重なかけがえのない瞬間が去来することも知っている。だが、その作品に直にふれ、子どもの誕生を目の当たりにし、セラピーの決定的瞬間に立ち会うとき、それらの体験はそうした既成の知見をはるかに凌駕する驚きと感動と畏怖をともなあって私たちの眼前に唐突に立ち現れてくる。それは作品や出来事的美を意図的に汲みとろうとしたり、既存の感覚に当てはめて感じるようなものではなく、これまであずかり知らなかった私たちの美的なところがその深淵からひきずりだされてくるような体験である。

結局、私たちに可能なことはクライアントの美的なところに関心を払い続けることだけなのだろう。子どもやクライアントが謎めく対象のわからなさには堪える必要があるように、私たちもまたクライアントの美的なところへの情熱を維持しつつ、そのわからなさを抱えていく態度を求められる。

こうした姿勢の維持により、美的体験は長期にわたる苦難と不毛、防衛と誤魔化しに満ちたセラピープロセス内に突然に姿を現す。それはとても稀少な瞬間である。そして、この美的な瞬間を媒介にして、クライアントも私たちもいつのまにか本質的な変化を被っている。臨床における美的体験を記述するならば、このような形になるのだろうと私は考えている。

V. 臨床素材※

6 歳になるその男児はかなり悲惨な成育史を生きのびてきていた。

両親は彼の生前に離婚し、彼の生後まもなく養育者である母も行方をくらました。ゆえに彼は母方祖父母にひきとられて生活していた。しかし、祖父母の体調不良に応じて、ときに叔母夫婦の家で長期間生活することもあり、生活状況はいかにも不安定であった。祖父母は基本的には彼の養育を誠実にこなしていたが、どこか養育への情熱や積極性を欠いた印象を醸しだしてもいた。また、叔母夫婦自身にも幼子がいたゆえに、やはりどうしても彼に十分な養育を提供しえなかった。そして、彼は知的に高い能力をもちつつも言葉数少なく、子どもらしい活力を欠いていた。保育所でも友達との交流は極度に乏しかった。

そのうちに音信不通だった母からの手紙が舞いこんだ。そこには母が遠隔地で暮らし、すでに別

家庭を設けていること、そのために彼とは二度と会えないことが記されていた。彼には母から手紙がきたことだけは伝えられたが、彼の心情を慮った祖父母によってその内容は伏せられた。当初は手紙がきたことに衝撃を受け、その内容を気にする素振りをみせたが、次第に彼の関心は薄れていったように周囲には見受けられた。数年後に祖父母の知人の勧めで手紙の内容が彼に明かされたが、別段気になる反応もなく、彼は淡々とその事実を受けとめているようだった。生活上でも特別な変化は見られなかった。

だが、しばらくすると、彼は急に落ち着きのない子どもへと変貌した。保育所内をあてもなく彷徨い、ときには所外にふらりととびだすこともあった。どれほど叱責したり配慮したりしても、この行動は改善されず、その理由として彼は「面白くないから」というのみだった。保育所職員や祖父母にとって、彼はますます何を考えているのかわからない、とらまえがたい子どもとなった。

こうした経過のなかで、彼は私の勤める相談機関に至った。私はこのような彼のありかたについて考えるために、週 2 回 50 分枠のプレイセラピーの場を設定した。セラピーは玩具が常設された部屋で行われ、祖父母と叔母が交代で彼を来談させることになった。2 週に 1 回ペースで祖父母や叔母に対しても別セラピストによる養育相談の場が設定された。

当初から、彼は特に緊張も不安も見せずに穏やかに遊んだ。玩具も器用に使いこなし、私との交流もいたって平穏なものであった。

だが、それだけだった。彼とのセラピーでは何ら豊かな象徴的表現も深い心的交流も展開されることはなく、家や人形を手にしても、ストーリー性のある遊びがなされるわけではなかった。それよりも彼は玩具の機能に注目し続けるのみだった。私もまた何の情緒も思考も湧かず、ほとんど遊びの意味をつかめないままにあった。彼は記述的診断としては自閉症とはいいいがたかったが、彼とのセラピーはそうしたタイプの子どもたちとの関わりを彷彿とさせるものがあつた。彼自身が日々の生活において、自らを機械的に機能させているにすぎず、人間的な体験から決定的に隔てられた世界を生きているように私には感じられた。

半年経つと、私は明確に彼とのセラピーに苦痛を覚えはじめた。というのも、彼が原初的で感覚的としか思えない“ひとり遊び”に没頭しはじめたからだ。ひとりで床や電車のレールにて玉転がしを行い、箱庭に車や電車や小動物のフィギュアを埋めては掘りかえすことをくりかえすようになった。彼はこれらの遊びに時間のすべてを費やした。こうした遊びを、たとえば出産の象徴的表現や Fort・Da 遊び (Freud, S., 1920) のような母親の出現と喪失をあらわす遊びとして私は取り扱ってみたが、奏功することはなかった。あるいはセラピスト (= 彼の内的母親) の内部空間への侵入 (= 埋める) とその中身の剥奪 (= 掘りかえす) といった文脈や心的なひきこもりという観点から関係性にフォーカスした介入を行ったとしても、何ら響くことはなかった。次第に私は成す術ないままに、ひたすらに退屈さと眠気をこらえるのみとなった。

1 年を経たころから、彼は私に電車のレールを作成させ、その間に自身は例の箱庭での“ひとり遊び”に没頭し、レールが完成するとひとりで電車を幾度も往来させる遊びを毎回行うようになった。彼自身がレールを作成することも、どのようなレールを作成してほしいかを要望することもなく、「先生が好きに作って」というのみだった。この遊びはルーティン化し、依然として私には何か途轍もなく不毛な時間が経過しているようにしか思えなかった。こうした私のありかたは、彼のところを理解しようとしないう彼のなかの“無関心な内的母親”を生きていることになるのだろうと考

えたりもしたが、何かこじつけめいた理解にすぎないようにも思えた。実際には彼が何をしているのかも、何を表現しようとしているのかも、何故こうした不毛な時間が経過しているのかもつかめないままに、とにかく私は彼との時間をやりすごすしかなかった。

ここまで記したごくフラットな営みは2年にわたって続いた。それでも彼はほとんどキャンセルすることなく来談し、この間に入学した小学校でも特に問題なくすごせていることが祖父母から報告された。友人との交流もある程度は成立しているようであった。しかし、私にはセラピー内で何か本質的な変化が生じたようには到底思えなかった。

こうした経過のなか、事が動いたのはその年の12月のあるセッションであった。その後に3週間の比較的長い休暇を控えたセッションであった。

そのはじめりはいつもと異なっていた。普段は開始後すぐにレールの作成を要求する彼が、このときは室内のカレンダーをまじまじと眺めてから私に話しかけた。それはもうすぐクリスマスであり、家にサンタクロースが来ると言うという内容だった。昨年も一昨年も来たので、今年も必ず来るに違いない、でも、なぜプレゼントをくれるのだろう、と彼は少し熱を帯びた口調で語った。彼がこのように日常の話をすることは珍しいことだった。私は彼が今何かとても大切なことを私に求めているように思えることを解釈した。しかし、彼は「うん。先生にもサンタさんにも、別に何もお願いはないよ。玩具もサンタさんが選んでくれた玩具でいいから」と応え、そのままいつものレール作成に私を促した。私はそれ以上言葉をつなげることができず、レール作りに取り組むしかなかった。彼の願いは決して叶うことなく、それゆえに彼は何も望みえないのだろうと私は感じていた。そして、いまやこのレール作りは私のなかで不毛の象徴と化しており、今回の新たな動きからもやはり何も生みだせなかったようだとは私は落胆した。彼は箱庭でビー玉や車を埋めては掘りかえす遊びを黙々とくりかえしていた。

気づくと、私はいつものような循環するレールとは異なり、どん詰まりのレールを作成していた。自身の心情のあからさまな表現に、私はひとり苦笑した。ただ、私は自分もまたいつもと異なるふるまいをしていることに思い至った。

ここでふと私は箱庭で玩具を埋めては掘りかえす彼を見て、以前にも空想した Fort・Da 遊びを思い起こした。このときの私は Ernst 坊や (Fort・Da 遊びは Freud,S.の孫である Ernst 坊やの遊びの様子を素材にしたといわれる) の姿よりも、それを見つめる Freud,S.の心境に思いを寄せていた。Ernst の母であり、Freud,S.の愛娘でもある Sophie の死を背景に書かれたこの描写を、かねてから私はもの悲しくも一抹の美しさをそなえた光景だと感じていた。

そして、目の前の彼もまた母を失った子どもであることを改めて感じなおしたとき、唐突にある考えが私のなかに浮かんできた。それはここに作られたレールは彼の母のもとへと向かう道なのではないかという考えであった。

彼には母が遠隔地にいることは知らされても、それがどこかは教えられてはいなかった。そもそもに彼は母から拒絶されていた。このレールは目的地には決して辿りつかない道であり、その彼の絶望感こそがあてもなくレールを作成せねばならない私の心境と呼応していることに私は気づいた。

この不毛なレール作りは、母の喪失という彼の絶望を私との間でコミュニケーションするためのツールであるように感じられた。彼の望みは決して成就しないのだろう。それゆえにサンタクロースや私への願いは何もないのだろう。これまでの私はこうした彼の絶望を本当の意味で理解することの

できない対象となる一方で、この絶望を生きる彼そのものになってもいた。

私はこの2年もの間、彼の痛みを真に理解しえないままにあった自分に失望した。しかし、たとえ願いは叶わなくとも、それでも尚、サンタクロースが来ることだけは信じることのできる彼に何か希望のようなものを感じてもいた。

私は彼に語りかけた。このレール作りが母に会いたい彼の願いをあらわしているように思えることを、ただ、その願いが叶いそうにないことも彼にはわかっていることを、それでもその悲しみや苦痛を私と共有することはできるかもしれないと彼が感じているように思えることを、そして、この長期休暇が明けても、変わらず私と出会えることを彼が望んでいるように思えることを、そうした内容をなるべく平易な言葉で伝えた。

彼には伝わったようだった。彼はこれまでに見せたことのない驚愕の表情を浮かべた。そして、「お母さんは来ない」とつぶやいた。私は彼を深く傷つけたと感じた。というよりも、私は彼の傷つきの深さをこのときようやく実感した。

彼は箱庭で遊び続けていたが、そのうちに私が作成したレールの袋小路の箇所にも木のフィギュアを1本置いた。それはクリスマスツリーを彷彿とさせる木だったが、私にはまるで墓標のようにも見えた。だが、やはりクリスマスツリーのようにも見えた。その横に彼は小さな家をひとつ置いた。

それから彼は分岐点となるレールを私に所望した。中途のレールをひとつ取り除いて、彼は自らその分岐点を取りつけた。そこから自分でレールを伸ばしていった。彼が自分でレールを敷いたのはこれがはじめてだった。この作業は黙々と続けられた。それは長い長いレールであった。作成のためのレールが尽きたとき、彼はどん詰まりに置かれていた木と家を自分が延長したレールの先に置きなおした。そして「こんな長い線路を走れる電車なんてあるのかな？」とつぶやき、「あるかな…ないかな…でも、あるかな…ねえ、先生はどう思う？」と私に尋ねた。

彼が私に何かを尋ねるのは珍しいことだった。私は「あなたの家と家族のところに行ける方法があるかどうかを知りたくなっているし、私がそのことをどう考えているのかも知りたくなっているんだね」と伝えた。彼は「先生もわからない？僕もわからない」と応えた。私は「ただ、家はあなたが進む先にあるのだろうね」と伝えた。しばらくしてから彼は昨年あるアミューズメントパークに祖父母と訪れた際に見た巨大なクリスマスツリーがとても綺麗だったことを話した。彼が自身の生活上のエピソードを話すこともやはり珍しいことだった。私は「あなたにとっても綺麗なものを見せてくれる家族が、今たしかに傍ににいるということを私に教えてくれてるんだね」と伝えた。彼は「うん。じいちゃんとばあちゃん」と応えた。

時間が終わると、「先生、またね」といい、少し生き生きとした様子で退室していった。これもはじめてのことだが、彼は退室際にカレンダーで次のセッションの日付を確認していった。

これを機に彼のセラピーは少しずつ変化していった。彼は私と共にレール作りに取り組むようになった。それからレールの周囲に建物や人のフィギュアを配置するようになり、世界が構築されていった。そこにドラマが展開されるようになった。そのドラマはひとりの少年が電車に乗って、車掌と共に様々な世界をめぐるという冒険活劇だった。その旅は“世界にひとつしかない秘宝”の探求を目的としていた。

黙々とレールを紡ぎ、その先に木と家を配置した彼に対して、あるいは寂寞としたセラピーのなかで、それでも探求を続けた彼に対して、私はある種の畏怖や尊厳や感動を、すなわち彼のこころ

の美をたしかに感じていたのである。

VI. 考察

セラピー状況における美的体験の生成は、クライアントの真実への探求心と共に、彼らのこころの美やポテンシャルを発見しようとするセラピストのこころと連動している。素材において、彼が私のレール作成に関する解釈を慄きながらも受けとり、行き詰まるレールを進展へのレールに作り替えたとき、私は彼のふるまいに胸を打たれた。同時に彼もまた今ある家族と共に体験した美的なエピソードの想起に至った。ここには相互に美的体験を喚起し合う彼と私がいたように思われる。

当初、母からの手紙が届いたとき、彼は衝撃を受けると共にその中身の開示を求めた。手紙は彼にとって“自分にも母親がいる”という外的事実への直面化になると同時に、あまりにも得体の知れない謎めいた母親を表象することにもなった。彼は母の考え（＝母の内部）を知ろうとしたが、現家族の配慮によってそれは成しえず（無論、内容を知らせたとしても彼の母への疑問は解かれることはなかっただろう）、彼の認識欲動の届かなさがよりはっきりと証明されるのみとなった。その結果、彼は母の内部空間に対する葛藤から退避し、自身が父母から生まれてきたことの意味を、捨てられたことの意味を、それでも生きていることの意味を探求する道を閉ざし、自身の生を機械的で自動反応的なものへと変質させた。その原心的生活はセラピー状況にも具現化し続けていた。

本素材における美的体験は、彼がクリスマスの話題をもちこみ、いつもとは異なる形でセラピーをスタートさせたところから顕現しつつあった。そのときの私はサンタクロースの話を“叶わぬ願い”という彼の絶望的な心境と結びつけることしかできなかったが、ここにはすでに何かが生まれんとする気配も漂っていた。そこには生の胎動があった。サンタクロースはたしかに内部に豊穡をはらむものの彼には手の届きたい対象、つまりは絶望の象徴として語られていたのかもしれない。だが、その語りには情熱の煌きがあった。彼はその対象を“所有する”ことなどできないことを知りつつも、“プレゼント（＝内部の豊穡）”を呈示してくれる理由を探求しようとしていた。

この局面で作られた袋小路のレールは、このセラピーに対する私の行き詰まり感と彼の袋小路的な心境——外적および内的両親対象への届きがたさ——とが明瞭に形になったものであった。それを機に私のもの想いは彼の絶望と希望をひろいあげたが、そのようなもの想いはいつもと異なる状況をつくりだした彼——新たな“分岐点”を創出した彼——によって生成されたものでもあった。ここにある相互性は Fort・Da 遊びについての私のもの想い、すなわち Ernst 坊やの行為に対する単なる心理学的意味の解説といった形ではなく、Freud—Sophie—Ernst 坊やという三者の相互的な関係性にフォーカスされた私の空想にも反映されていた。

私が両親を喪失した彼の悲しみ、痛み、絶望に真にふれたのはこのときが最初であった。もちろん、それまでも両親を失ったことによる彼の深い傷つきを想うことはあった。この明らかに行き詰まっているセラピーが彼の人生の行き詰まりと呼応しているらしいことを考えることもあった。だが、こうした理解は Meltzer (1988) の言葉を借りれば、“記号的”な、“無意味な語らい”であった。私はわかっていながら、何もわかってはいなかった。だからこそ、不毛なレール制作を通じて彼が伝えようとしていたことを、私は長らくの間感じとることができないままにあった。私は彼の絶望を理解することから微妙な形で自分を逸らしていた。それは私が彼や彼の生きる状況に何の希望も見いだせなかったゆえであった。

だが、このセッションにて私たちは対象の不在にまつわる彼の心的苦痛と絶望にわずかながらもふれることができた。無論、その機序は“対象の不在時に乳房を象徴的に再現しようとする乳児の志向とふたたび現れた母親によるコンテイン”という文脈から理解しうるものでもある。だが、私は“サンタクロース”という象徴的ながらも「現前する対象」——（未だ前概念水準にあるが）実際にプレゼントを贈る祖父母——との関係性から、事が動きはじめていることに着目する必要があると感じている。（彼がカレンダーという素材で結びつけたように）同時にこのサンタクロースは“なぜかセラピーというプレゼントを提供し続けてくれるセラピスト”でもあった。そこには祖父母とセラピストという彼の外的および内的生活を抱え続ける「現前する対象」の美を感知しはじめた彼がいたのではなかろうか（ただ、私自身はまだこの時点では絶望の感覚に支配されており、セラピストとしての私の美的な側面——構造を維持し、枯渇しそうになりつつもセラピスト機能を保持しながら彼と会い続けようとする私——を感知しているのは、あくまで彼の生産的な心的能力である）。

そして、この美的体験の萌芽は分析的機能を取り戻した私の解釈によって輪郭づけられ、彼は美的衝撃を体験するに至った。だが、彼はその衝撃から退避することなく、その苦難に堪えながら探求の歩を進めた。その歩みはふたりの間に醸成された美的相互性によって支えられていた。

結局のところ、私が彼に美を感じたのは、絶望的な状況をふまえつつも、尚、内的両親対象へと至ろうとする彼の挑戦に対してである。それはとても長い探求への旅路である（おそらくそれは私がレールを紡ぎ続けた長い時間と呼応しているが、それすらも彼の長い旅路のわずか一部分にすぎないだろう）。両親の喪失という不条理な謎に対して、それでも彼は“木（＝ペニースー父）”と“家”（＝容器一母）に象徴される内的両親像へと向かっていった。その矛先にあるものは未だ部分対象としての両親像にすぎないが、それでも彼は「対象と共に考える」道をたしかに歩みはじめた。

ふりかえると、こうした彼の挑戦は最初の主訴にある“園内をあてもなく彷徨う彼”の姿に実はすでにひとつの可能態として示されていたのかもしれない。あるいは、それは2年もの間何も気づこうとせず、彼を理解しようとしないう“心的に死に絶えた対象”と化していた私の傍で、それでもFort・Da遊びを続けていた彼の姿にもあらわされていたのかもしれない。

いずれにせよ、美的体験はクライアントとセラピスト双方の「知ろうとするところ」、つまりは真実の美しさとそれゆえに喚起される情熱によって駆動する。

美的体験によって呼び覚まされたところは、ときに喜びを、ときに苦痛を、ときに希望を、ときに絶望を、私たちに生起する。そして、それこそが私たちが人間的に生きることのたしかな礎となっているように私には思える。

※臨床素材に関して掲載許可を頂いているが、プライバシーの問題を考慮して本質を損なわない程度に省略・改変している。

文 献

- Baranger, M.・Baranger, W. (1966). *Insight in the analytic situation*. Psychoanalysis in America. International Universities Press.
- Bion, W. R. (1962). *Learning from Experience*. Heinemann. 福本修（訳）（2002）. 経験から学ぶこと. 精神分析の方法Ⅰ——セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局.

- Bion, W. R. (1963). *Elements of Psycho-analysis*. Heinemann. 福本修 (訳) (2002). 精神分析の要素. 精神分析の方法 I ——セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局.
- Bion, W. R. (1965). *Transformations*. Heinemann. 福本修 (訳) (2002). 変形. 精神分析の方法 II ——セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局.
- Bion, W. R. (1970). *Attention and Interpretation*. Tavistock Publication.
- Freud, S. (1920). *Beyond the Pleasure Principle*. SE 18, pp. 1-64.
- 藤山直樹 (2010). 「劇的瞬間」と「精神分析的瞬間」. 精神分析研究, **54** (1), 12-17.
- 福本修 (1995). メルツァーの発展. 小此木啓吾・妙木浩之 (編). [現代のエスプリ] 別冊 精神分析の現在. 至文堂, pp. 82-100.
- Meltzer, D. (1967). *The Psycho-Analytical Process*. Karnac Books. 松木邦裕 (監訳) (2010). 精神分析過程. 金剛出版.
- Meltzer, D.・Bremner, J.・Hoxter, S.・Weddel, D.・Wittenberg, I. (1975). *Explorations in Autism*. Karnac Books. 平井正三 (監訳) (2014). 自閉症世界の探求——精神分析的研究より. 金剛出版, pp. 251-267.
- Meltzer, D. (1978). *The Kleinian Development*. Karnac Books. 松木邦裕 (監訳) (2015). クライン派の発展. 金剛出版.
- Meltzer, D. (1984). *Dream-Life ; A Re-examination of the Psycho-analytical Theory and Technique*. Karnac Books. 新宮一成・福本修・平井正三 (訳) (2004). 夢生活——精神分析理論と技法の再検討. 金剛出版.
- Meltzer, D. (1986). *Studies in Extended Metapsychology ; Clinical Applications of Bion's Ideas*. Karnac Books.
- Meltzer, D.・Williams, M. H. (1988). *The Apprehension of Beauty ; The Role of Aesthetic Conflict in Development, Art and Violence*. Karnac Books. 細澤仁 (監訳) (2010). 精神分析と美. みすず書房.
- Meltzer, D. (1992). *The Claustrium ; An Investigation of Claustrophobic Phenomena*. Karnac Books.
- 村岡倫子 (2000). 精神療法における心的変化——ターニングポイントに何が起きるか. 精神分析研究, **44** (4), 444-454.
- Ogden, T. H. (1997). *Reverie and Interpretation ; Sensing Something Human*. Jason Aronson. 大矢泰士 (訳) (2006). もの想いと解釈——人間的な何かを感じとること. 岩崎学術出版社.
- 飛谷渉 (2004). メルツァーの急進的展開. 松木邦裕 (編). [現代のエスプリ] 別冊 現代の精神分析家シリーズ オールアバウト「メラニークライン」. 至文堂, pp. 198-212.
- 飛谷渉 (2011). メルツァーとピオン——美と真実の出会い. 精神分析研究, **55** (1), 18-25.

(京都大学大学院 臨床実践指導者養成コース 博士後期課程 1 回生)
(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

精神分析的心理療法における美的体験の意義

—Meltzer, D.の美の理解をめぐる—

上田 勝久

本論文は Meltzer の美の理論について概観し、その臨床的意義について検討したものである。Meltzer は美的体験を人の原初的体験に据え、それは人のこころを創造し、人が人を愛し、憎み、知ろうとすることの基盤を成すとした。美的体験の起源は胎内体験にまで遡られるが、それが明確な形をとるのは母親との実際的な遭遇である。美しい形態をもつ母にある種の衝撃と共に出会った乳児は、その外形の内部を知ることにより情熱を迸らせる。だが、その内部はあまりに謎めいている。乳児は自身を魅了してやまない母ととらまえたがたい謎めいた母との輻輳的な出会いのなかで美的葛藤を体験する。この葛藤のなかで、尚も対象を「知ろうとする (K)」ことが、こころの発展に寄与することを Meltzer は主張した。本稿ではそのうえで重要なファクターとなる美的相互性に着目し、臨床素材を介してその意義を明らかにした。

Significance of the Aesthetic Experience in Psychoanalytic Psychotherapy : on the Apprehension of Beauty of Meltzer.

UEDA Katsuhisa

The article reviews Meltzer's aesthetic theory and discusses its clinical significance. Meltzer placed the aesthetic experience as one's primary experience. Experience creates and develops one's mind, and is the basis by which one loves, hates, and knows others. The origin of aesthetic experience traces to experience in the womb, but it is with the realistic encounter with the mother that it takes shape. When the infant meets the mother with beautiful form, he is shocked and lets passion surge in knowing the inside of her external form. However, the inside is very mysterious. The infant passes through aesthetic conflict in congested encounter with the mother who continues attracting own and mysterious own who it is hard to grasp. Meltzer insisted that further "knowing" the object contributes to the development of the mind. This article focuses on the aesthetic reciprocity that is an important factor in the aesthetic experience, and discusses its significance based on clinical data.

キーワード： 美的体験, 美的葛藤, 美的相互性, 情熱

Keywords: the aesthetic experience, the aesthetic conflict, the aesthetic reciprocity, passion